

### <大会記念講演>アイスランドの今昔：気候と人口小論

ASAI, Tatsuro / 浅井, 辰郎

---

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

20

(発行年 / Year)

1996-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025880>

## アイスランドの今昔

——気候と人口小論——

浅井辰郎

- I なぜアイスランドか？ 本稿の目的・方法（記載と人口論的考察）謝辞
- II 自然に関する展望
  - 1 気候は「夏のない秋田」
  - 2 1000年間の気候変化
  - 3 限界の農業生産と漁業の重要性
  - 4 噴火による災害
  - 5 伝染病による災害
  - 6 自然による人口増減の考察第1部
- III アイスランドの今昔（記載、とくに人口増減と政治的・宗教的背景）
  - 1 黄金時代（移住期／自由共和国期）記載、順調な人口増加とその背景
  - 2 暗黒時代（ノルウェー王期／デンマーク王期。記載、鋸歯状に漸減する人口）
  - 3 独立闘争時代（王と多数指導者との闘争）記載、人口変動）
  - 4 独立時代（50年間の国内外の政治・経済的發展。記載、人口急増の背景）
- IV 人口増減に関する自然的・社会的考察
  - 1 自然による人口増減の考察第1部の詳説 気温低下と人口減少の定量化
  - 2 内紛や外来政治・宗教による人口減少
  - 3 独立闘争期、独立後の人口急増
  - 4 人口増減に関する結論

### I なぜアイスランドか？ 本稿の目的・方法（記載と人口論的考察）謝辞

〔動機〕昭和30年ごろから法政の第2教養部で、アイスランドについて熱心に講義した。それはハンチントンの本<sup>34)</sup>で強烈な印象を受けたからである。すなわち独立直前のアイスランドは人口僅か12万ながら（現在26万）、20の新聞や20以上の文学、考古学、言語学、歴史学、民族学、宗教学、工学、博物学、一般科学、農学、などの定期刊行物があり、3つの医学協会や看護婦、助産婦、歯科医、薬剤師、獣医の協会もあって、前3者からは月刊雑誌も出ていた。・・・アイスランド語を話せない旅行者たちは、一般住民からラテン語で話し掛けられて驚かされた。首都には神学、古典文学、医学、法律学、哲学の諸科を有する総合大学や4個の図書館があり、地方にも20の図書館があって、その若干は数世紀前に出来

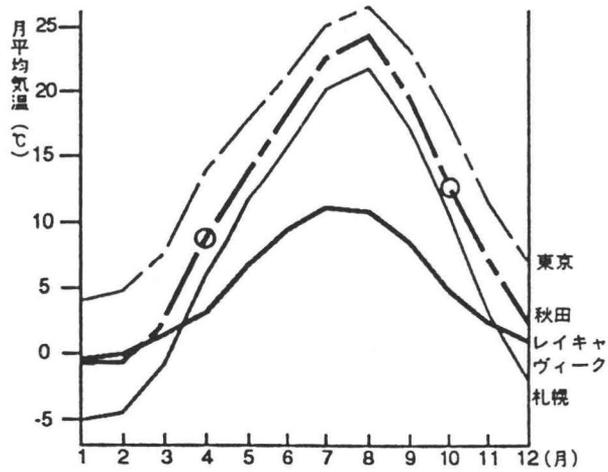
た。・・・大英百科事典には10余人のアイスランド人が載り、人口割ではフランス、スイス、ドイツの3倍も著名な人がいたことを示す。・・・指導者達には失敗や利己主義がなかったらしいし、農民と漁民の間には緊密な協同組合が発達していたなど、素晴らしい社会であった、とある。こんな動機からぜひここをこの目で見たいと願い、昭和39年度法政大学留学生として2か月の実地調査を行い得た。その後も3回訪れた。

〔本稿の目的・方法〕ここ30年間に集めた文献・統計・図版・写真などによる、標題に関するアイスランドの地理学的・歴史学的記述およびその出来る限りの人口論的考察。

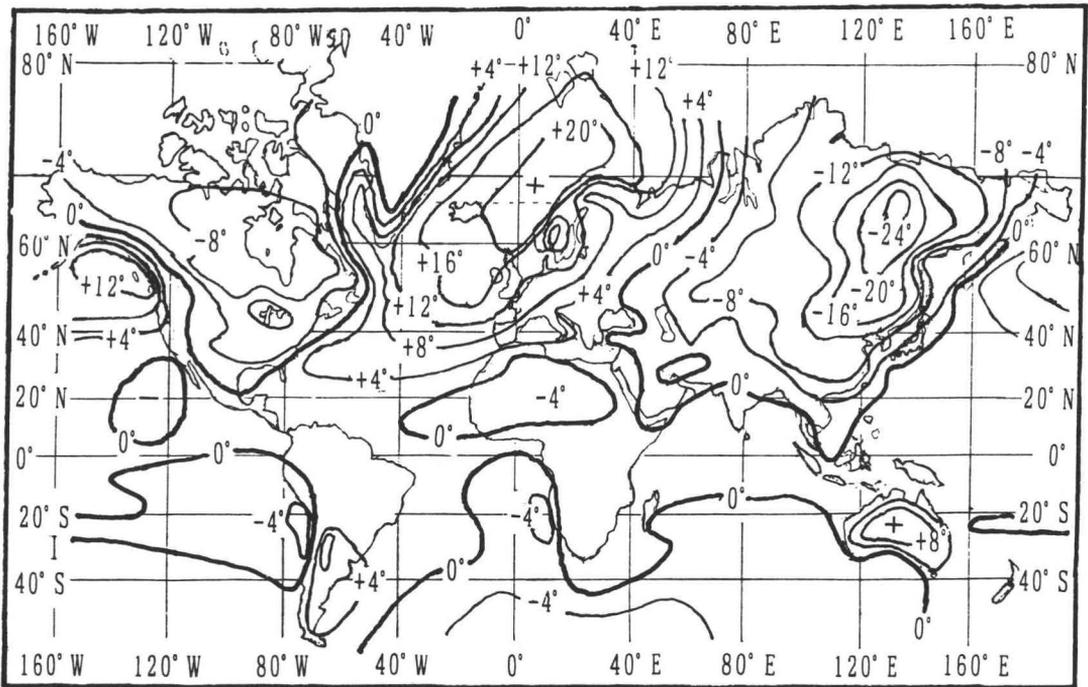
〔謝辞〕各回の調査を実施できた法政大学、小松左京氏、教育社のご好意に深謝する。

### II 自然に関する展望

#### 1 気候は「夏のない秋田」



第1図 アイスランドの気温推移。「夏のない秋田」で4月の○から10月の○へ跳ぶ。

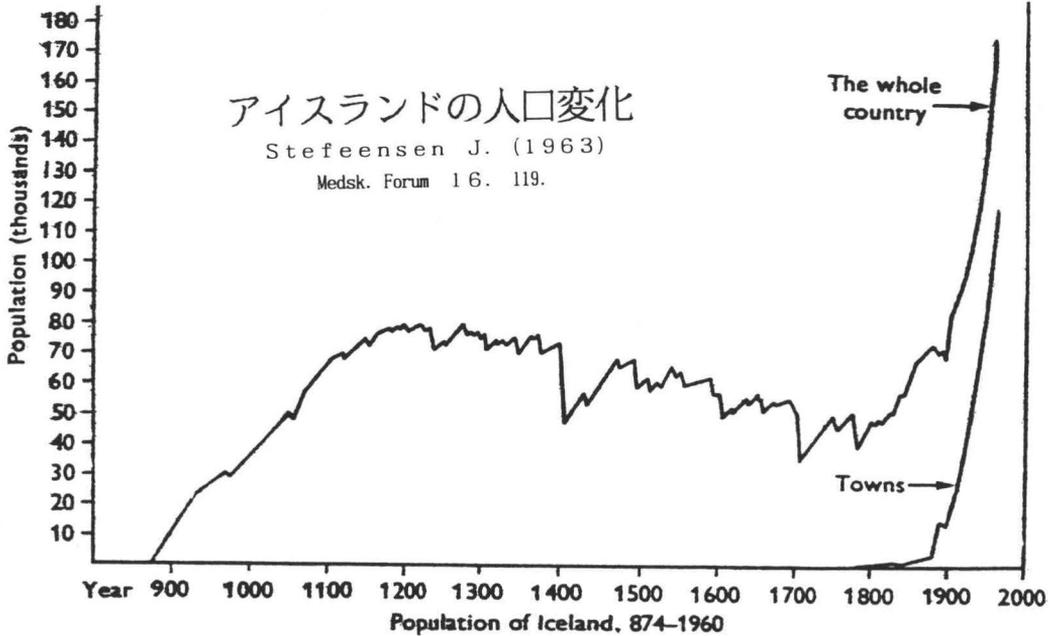
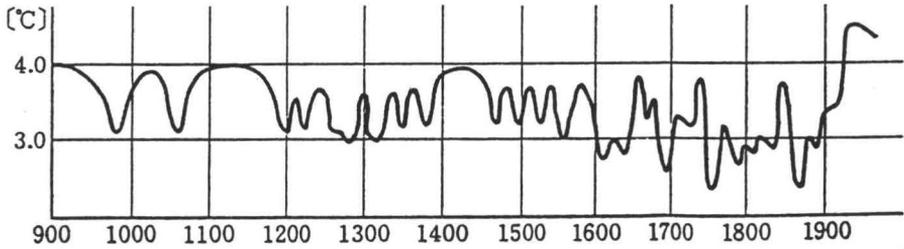


第2図 1月の気温等偏差線図(ケッペン)<sup>37)</sup>

第1図はレイキャヴィーク、札幌、秋田、東京の30年間月平均気温を図化したもので、レイキャヴィークの冬は「秋田なみ」、札幌ほど寒くはない。作物の育つ夏はなくて、○印のように秋田の4月から10月に飛んでいる。高緯度では一般に年較差が大きいのに、なぜ北緯65°のここでは

こんなに小さいのだろうか。それは全く大西洋暖流の賜物で、第2図がそれを如実に示している。これはケッペン<sup>37)</sup>が緯度ごとに地球を一周して1月の平均気温を計算し、それからの各地の気温偏差を図化したものである。これを見るとアイスランドの緯度では、東部シベリヤが-24℃に達する

10年間平均推定気温 (Bergthorsson, 1962)



史前時代	黄金時代		暗黒時代 (独立闘争期)		独立時代
	移住期	自由国期	ルウエー王期	デンマーク王期	

第3図 10年間平均推定気温・人口変化・時代区分<sup>28)</sup>  
ベルグソールソン<sup>25)</sup> ステフェンセン<sup>43)</sup>

のに、その島だけは+16°C~+20°Cにあって、世界最大のプラス偏差を示す唯一の陸地である。このことはぜひ銘記されたい。しかし首都の最近30年の年平均気温はわずか5.0°Cで、次の第3図上とともにその低温を見られたい。

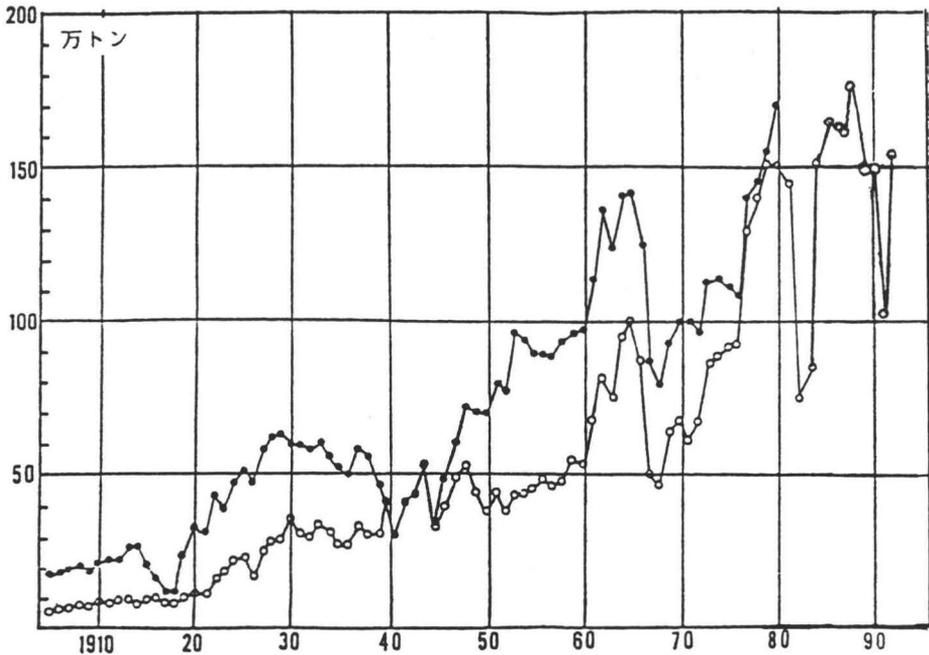
## 2 1000間の気候変化 (第3図上)

これはレイキャヴィーク気象台のP. ベルグソールソン<sup>25)</sup>が1962年に発表した、900年から1960年までの島の10年間平均推定気温である。この算法は、1850年以後の東部・西部の気象観測値と、その期間における流水や飢饉との相関

を、巧みに900年まで外挿して作った労作である。注目したいのは1300年頃までの10年間平均推定気温はせいぜい4°C、以後1600年までは3.5°C、以後1900年までは実に3°Cで、それから急に4.5°Cほどに昇っている。図にはないが、現在の東部・西部の30年の実測平均気温は4.3°Cである。要するにアイスランドの歴史上の気温変化はこんな状態であり、それは良い時期には牧畜業を確かに維持出来るが、悪い時期には飢饉に苦しまざるを得ない農業限界地であることを示す。

## 3 限界的農業生産と漁業の重要性<sup>14)</sup>





第5図 漁獲量の推移<sup>20)</sup>。白丸：アイスランドだけ。黒丸：外国船加算。

出型のラーキ火口列の噴火およびそれらの災害を述べよう。ヘックラ火山活動の最初の記録は1104年で、以来1991年までに17回の噴火を繰り返し、平均間隔は52年である。1104年の噴火では降灰は北に向かって紡錘状に流れ、70km北でもなお厚さが10cmに達した。従って20km北あたりにあった古い農家、例えば発掘されたストーンクなどの農家は、20cm前後の火山砂に覆われて農場も放牧場も荒廃し、生活が出来なくなって放棄された模様である。しかし人口への大きな影響はなかったらしい。

ラーキ火口列(ラーカギーガル)は1783年7月8日に約100個の火口列が溶岩を流出させ翌年1月まで続いた。流れ出た溶岩はクヴェルヴィス川やスカフタ川を下って565km<sup>2</sup>を覆い、流出量は12.3km<sup>2</sup>に達した。これは多くの農場を呑み込んだが、もっと恐ろしいのはほとんど全国に及んだ降灰被害である。それによって牛の50%、馬の76%、羊の77%が死に、飢饉が起こって9000人以上、換言すれば全人口の5分の1が死んだ。この酷さにデンマーク政府は、残った全人口をユトランドに移そうと考えたほどであった。第3図下

の最後の人口落ち込みがこれである。なお中村<sup>15)</sup>によれば、この噴火では火山灰の放出は意外に少なく0.3km<sup>3</sup>に過ぎなかったが、噴出ガス中には硫黄分が多くて、亜硫酸ガスにして1.3~6.3×10<sup>7</sup>tという驚くべき量であった。これは同年のグリーンランド氷床中の降下エアロゾル酸性度の突出量で確認される。このため「青い霧」が欧州全土や北米、あるいはアルタイ山脈でも見られ、夏でも日光は弱まり、冬は格段に寒く、雪はいつまでも消えなかった。上記の莫大な家畜減、それによる人口減は降灰説より、この広範囲にわたるガス説によって一層よく理解できる。

### 5 伝染病による災害<sup>28)</sup>

気候の悪化と過度の開発は植生地域を狭め、国土の人口維持能力を低めた。乾草の収穫が減り、漁獲が減って飢饉が迫ると、伝染病に対する人間の抵抗力も減退した。中でも天然痘とペストは最悪で、共にヨーロッパからたちまち伝染した。天然痘は30年ごとぐらいに猛威を振るい、ペストは1402~4年と1495年に2回襲った。1707~9年の天然痘は18,000人を死なせ、残った人口は推定約34,000人という史上最小の人口になった。

1839年の天然痘は割に軽く済んだが、1882年～3年の人口停滞は猛威を振った麻疹によるもので、人口に影を落した最後の伝染病は1918年のスペイン風邪であった。

#### 6 自然による人口増減の考察第1部<sup>28)</sup>

西暦874年に始まるという多数のスカンジナビヤ人や少数のケルト人の移住で、わずかな修道僧のいたアイスランドに人口増加が起こり、970年頃には、国土の1%に過ぎない農業適地は早くも占拠されて、移住は先細りになった。これを移住期という。(第3図下)。(なお現在の研究では、アイスランド人にはケルト人の言語や文化はほとんど残っていないが、血液型では相当に残るという)。その後1100年頃までも少数の移住があり、1200年頃まではほぼ順調な自然増が続いて、人口は約80,000人に達して最大となり、黄金時代が爛熟した。この間は上述の10年間推定平均気温も4.0℃近くあり、大麦が栽培されるよい環境であった。しかし過放牧による原野の荒廃、採暖のために低地一面にあった林木の伐採、それによる土壌侵食や一部の砂漠化もこの頃からすでに始まっていた。<sup>38)</sup> その後は気温の低下や変動も多くなり、生産力と人口は低下傾向になった。後述する人口の上縁部下降線の起点である。1402～04年には上記の黒死病(ペスト)で住民の約3分の1が死んだ。第3図下の中央にある大きな凹みがそれである。17, 18世紀は「小氷期」で1707～09年の陥没は天然痘による18,000人の死、1783～86年のそれはラーキ火山噴火による牧野の荒廃と家畜の斃死である。故ソウラリンソンによれば、溶岩流、とくに噴煙、中村によれば亜硫酸ガスは、全国の牛馬羊の大部分を斃死させ、人口を9,000人以上減少させた。ついで1881～82年の凶冷・飢饉も人口停滞を起こした。

第3図下に示す植民開始から1200年頃までの約80,000人に到る人口増加曲線は、初年を10人とする浅井の等差級数計算では、移住・自然増を含めて年平均1.45人増に相当する。一方1200年を頂点とし(1784年の推定34,000人を飛ばして)1786年に38,400人まで下がった人口減少曲線を鋸歯状凹みの上縁部だけについて計算すると、年

平均マイナス0.18人に相当する。これを「上縁部下降線」と呼ぼう。さてここに大きな疑問が3点ある。①この上縁部下降線は何を意味するか。②災害後の回復の傾斜が1100年頃までの人口増加の傾斜とよく似るのは何を意味するか。③回復は上縁部下降線まで昇ると、そこで止まり元の8万人まで回復しないのは何故か。この仮説の大胆な解答には次章以下の知識も必要であるから、最後のIV章「人口増減に関する自然的・社会的考察」で詳細に述べたい。

1880年以後、現在までの急激な人口増加率は毎年1%余<sup>42)</sup>であって、暗黒時代の人口減少とは正に対照的であり、ここで急に变化した自然的要因には10年間平均気温の急上昇しか見当たらない。果してこれが原因だろうか。否、アイスランドの近代的急発展がその原因らしい。記載をかねて人口変化の宗教的、政治的要因を次章以下で解明したい。

### III アイスランドの今昔(記載、とくに人口増減と政治的・宗教的背景)

#### 1 黄金時代(移住期/自由共和国期記載、順調な人口増加とその背景)

[移住期(植民期)伝874～930]<sup>28)</sup>既にフロウキやインゴルブルのことは述べたが、移住の動機は一般にノルウェーのハラルド美髪王の専制とされ、彼が同輩に課した税金への反発が原因だという。彼はその魔手をアイルランド、スコットランドなどにも伸ばしたため、これらケルト地域に住んでいた北歐人も移住してきた。初期の移住者は広大な土地を占取し、それを親戚・友人・従者たちに分配し、みずからは指導者(ゴージイ Goði)となった。さらに堂を建ててアイシル Æsir 諸神(主神はオージン、光明神バルドル、フレー神など)を祭り、一族の精神的・経済的中心となった。また近隣に揉め事があると、シングメンとして民会を開き、全員一致の会議を行なってそれを解決した。この全員一致制とは、全員に上下がないことでゲルマン社会の伝統であった。(後には多数決制に変化した)。この民会は930年には野外国

会アルシングに発展し、南西部のシングヴェトリル（会議の平原）で毎年初夏の2週間、39人のゴージイが全国から集まって行なわれた。司会は法律に精通してその全部を記憶できる「法の宣言者」が行ない、任期は3年で、毎回ゴージイたちの前で法律の3分の1づつを暗唱し、アルシング運営手続の法律や議題に関する法律も暗唱せねばならなかった。なおこれらの法律は12世紀初頭になって初めて書き下ろされた。アルシングのもう一つの重要機能はゴージイ中から任命された裁判官が法廷を構成し、民事事件を聴取し、全国に共通する判決を下す事であった。さらに重要な外交、宗教など国政に関する立法、司法、行政をここで行った。

ここは大きく長い割れ目アルマンナギャウの南西斜面と平原で、清冽なエクサール川に添い、下流には魚の豊富なシングヴァトラ湖を控えて、人馬ともに生活しやすかつさ。ゴージイの家族や一般民衆は芝土やテントで仮小屋を作り、会期中全国的な文化・経済的交流を楽しんだ。多くの男女、若者が群れ集い、スポーツ、娯楽、詩作、物語に興じた。老人は議論に熱中したり、新しい知人を作ったり、若者の結婚を世話した。若者は賢者からいかに法律は創られ、訴訟はどう法廷に出されるかを学んだ。若い詩人は老詩人からその詩作の努力を聞き、古い詩や物語を生き生きと頭に刻み込んだ。こうしてサガが次々に作られた。外国からの最新情報は熱心に求められ、美しい布や立派な武器が展示され、吟味された。あらゆる噂話、競争、口論、笑い、雑踏があり、知的な法律や詩に関する討論、アイスランド人の文化遺産やその将来文化について激論する者たちもいた。

以上はアルシング時の人々の情景であるが、少し突っ込んで平時の彼らの生活態度を見てみたい。それには、作者は未詳だが、700～900年の間に作られ、後に文字で書き留められた『ヴァイキングの知恵（オーデンの箴言）』<sup>9)</sup>が適切なので、これに私になりの〔見出し〕を付け、並べ替えて整理し、その若干を列挙しよう。（なおこれは珍しくもアイスランドで刊行された日本活字の本で、谷口幸男氏訳。）

〔用心〕 先に進む前に通路すべてに気を配れ。まわりを見回し用心せよ。どこに敵が潜んでいるか知れないから。

野外に出たら武器の置いてある所から一歩も離れるな。いつ何時外で槍が必要になるか知れないから。

〔親切〕 膝を凍えさせて着いた人には火が必要だ。山々を越えてきた人には食べ物と衣服が必要だ。

食事にやって来る人には水とナプキンに暖かいもてなし。出来ることなら親切な言葉と受け答えが必要だ。

〔友情〕 友達には友達らしく、贈物には贈物を返し、笑いには笑いを、偽りには偽りを返すべきだ。

大層な贈物をしなくてもよい。僅かな物でよい評判をとることも多い。パン半分と酒杯の酒を分けてやり、友情を得たこともある。

よいか。もしも信頼できる友を持ち、その者からよいことを期待するなら、友と心を通わせ、贈物を交換し、再々会いに行け。

〔分別〕 旅にでかけるのに優れた分別に勝る友はない。ビールの飲み過ぎより悪い友は連れてゆくな。

酒杯を持ったままにせず、蜜酒は程々に飲め。必要なことだけ喋るか、さもなくば口をつぐめ。お前が人より早く床についたとて、不躰だと咎め立てする者はいない。

客は一所にいつまでも尻を落ち着けず立ち去るべきだ。他人の家で長居をすれば愛想のよかった者にまで愛想づかしされる。

〔知者〕 広く旅をして所々方々を巡った人だけが人々の気質をよく理解している。その人こそ知者だ。

己の聡明さを自慢するな。賢くて無口な人は他家を訪れても慎しく振舞い、ひどい目には会わぬ。分別より

頼りになる友はないのだから。

〔愚者〕家畜の群れでも草地を離れ家路につく制限を知っている。だが愚か者は己の腹の限度を知らない。

愚か者は自分に笑いかける人は皆友達だと思ひ込む。だが賢い人と同席すると皆が陰口をきいているのに気が付かない。

愚か者は戦いから身を守ればいつまでも生きられると思う。だが槍は容赦しても寄る年なみは容赦しない。

〔生活〕物惜しみせぬ豪胆な人はよい生活を送り、心配事などは殆どない。だが臆病者は何事にも怯え、いつも贈物を怖がる。

人の財産や生命を狙う者は早起きしなければならぬ。寝ている狼に股肉は手に入らない。寝坊助には勝利は手に入らない。

何も知らぬ者は金ゆえに阿呆になる者が多いことを知らない。金持ちもいれば貧乏人もいる。貧乏人をいささかも非難すべきではない。

〔食事〕招待されたのでなかったら、いつも朝食はたっぷり摂ってゆけ。腹が減ったら座っても口をあけ、ガツガツして物も言えない。

家はよいものだ。たとえ狭くても家では主人だ。食事のたびに施しを乞う者は胸から血の出る思いだ。

〔幸福〕人の子にとって火と太陽の光よりよいものはない。もしも人が健康で恥をかかずに生きていけたら幸せだ。

野原でひとりで立つマツは枯れる。樹皮も葉もそれを守ってはくれない。誰にも愛されない人間も同じことだ。どうして長生きできよう。

〔名声〕たとえ父の死後に生まれた子でも息子のおの方がよい。身内が身内のために建てるのでなかったら道の辺に記念の石碑が建つことは稀だ。

財産は滅び、身内は死に絶え、自分も同じように死ぬ。だが決して滅びぬのが自らの得た名声だ。

この要点は、人生の究極の目的は名声であって、金でも富でもない。このためには積極的に生活せよ、友情を重んじよ、相手には親切にし、何事も控え目にせよ、・・というごく普通な生活信条のほかに、一部日本の武士道を彷彿させる、激しくかつ清貧に甘んずる思想もある。ただし史上有名な対等な個人主義、祖孫の一体観、激しい復讐の念、貞淑な結婚観などは、ここにはなぜか現われていない。それはともかく外部から彼らは、粗暴、現実的と見られた節があり、キリスト教化の対象にもなった。

〔自由国期 930~1262〕<sup>28)</sup>

930~1030年に亙る一世紀は「サガ期」とも呼ばれる若者の世紀で、「アイスランド人のサガ」に多くの記事がある。沢山の議論、国内外での英雄的行為、怨恨や確執、恋愛物語、外国に行って宮廷詩人となり、その王や王子を讃えて立派な贈物を貰った話など、種は尽きない。彼らは東はビザンチン、西は982年にはグリーンランドを発見して植民し、1000年には北米大陸に到達している。正に若者は黄金時代の寵児の名に値しよう。

ノルウェーでは10世紀中にキリスト教が広まり、この影響でアイスランドでも数人の豪族がこれに帰依した。1000年のアルシングではこれが最大の問題となり、何れを採るかが「法の宣言者」ソルゲインに任された。固有宗教者（異教徒）と思われていた彼は、この国民的課題を3日も沈思の後、意外にもキリスト教を採択すると決定した。表面的には古い宗教組織も温存され、国の安全は保たれたかに見えたが、裏ではアイスランドの内部崩壊、豪族抗争、特にノルウェー王クリスチアンの干渉が芽生える温床となった。

1000年の改宗以後、それは宗教的征服だけでなく、植民地化だったことを露わにした。ゴージイたちは教会を建て、息子を牧師養成学校に入れた。1056年に南部のスカールホルトで最初のアイスランド人司教が受任され、1106年には北のホッ

ラルでも受任された。この頃は教会には財政基盤がなく、ほとんど豪族に依存していた。しかし1096年にアルシングで十分の一税が可決されると、この状況は相当に改善された。これは財産所有者が申告財産の1%を支払うものだったが、なお豪族はその一部を懐と勢力を肥やすのに使った。やっと共和国崩壊後の1275年、新教会法が出来て、教会の富みと権威は急激に増大した。

ほぼ1030～1118年頃は「平和期」と呼ばれ、人々の態度・振舞は穏やかになって行った。キリスト教導入の良い面は、教会学校ができて内外の老若男女が刺激し合い、12～13世紀に文学活動と歴史研究を中心とした高度のアイスランド文化を築いたことである。その拠点には11、12世紀に創建された南はスカゥルホルト、北はホゥラルの牧師館と9館の修道院および女子修道院であった。(第6図) この時代にアイスランド人学者はその言語で数冊の本を著わし、古来の法律を文書体で一部だが書き下ろした。こうして1260年頃にアイスランド文芸は最高潮に達したが、あとは次第に模倣時代になり下がった。

共和国の没落には経済的因子も関わっていた。植民時代の最初から、国内経済の基礎は牧羊・牧牛であった。これで肉や酪農製品を作って自給し、特に羊毛はホームスパン地の原料として13世紀の終まで重要な輸出品であった。アイスランドは海洋中にあり、冬も日本の秋田なみなので、当初はその豊かな草地に1年中放牧できた。しかし過放牧やそれに伴う土壌侵食のため、地力が衰えて次第に放牧は夏だけになり、冬の飼料は夏のうちに耕作牧草地から刈取り、乾燥し、貯蔵しなければならなくなった。そしてこれができない時は、家畜は飢えと寒さで大量に死に、多くの地域でその回復に数年を要した。

共和国時代の最終期は「社会混乱期」と呼ばれ、1230～62年を指す。伝統的には対等であったアイスランド人社会に、なぜか12世紀初頭からは少数の豪族が権力を増強し始め、ゴージイの権威が売買・贈与されさえした。教会名義のその所領は、十分の一税を免れるので、豪族たちは多額の定収入を持つに至った。彼らはそれでさらに土地

財産を購入・寄進し、税を免れては富を殖やし、13世紀初頭には実に3～4家族で全国を支配するに至った。しかし彼らは外国に狙われていることも忘れて、1235年から1262年まで内戦に明け暮れ、お互いいがみ合っていた。

一方、1230年頃、2人のアイスランド人司教の空席に乗じて、ノルウェー王ホーコンはニザロウス(トロニエム)の大司教に、2人のノルウェー人司教を任命させた。彼らは豪族たちから教会を独立させ、その所領を牧師に引き渡すよう強制した。激しい聖俗戦争が国内に起こり、豪族たちは外国勢力からも攻撃を受けた。それぞれがホーコン王に援助を求めたが、それは来るどころか、お互いは王の陰謀で離間させられ、ついに1262年に王と同盟を誓わされた。これを王とアルシングとの間に交わされた「古い盟約」という。

1241年、愛国の詩人・歴史家・法の宣言者スノリ・ストゥルトソンが、ノルウェー王に援助を求めた仇のギゾールに殺害されたのも、この同盟に至る致命の原因であった。こうして最後の植民も終り、自由共和国は壊滅して、輝かしい黄金時代は終焉を迎えた。

## 2 暗黒時代(ノルウェー王期/デンマーク王期記載鋸歯状に漸減する人口)

[ノルウェー王期1262～1380]<sup>28)</sup>

気候は悪化し、農業生産力は低くなり、富は一部豪族に集中したため、庶民は極めて貧しくなり、通風も居心地も悪く、昔より小さくなった芝土の家の一室バーツストーヴァ(蒸気の浴室)に肩寄せあって住むしかなかった。これは建築史上でも明瞭である。外国貿易は始めは大部分がアイスランド人の手中にあったが、共和国時代が終るとその船は材木がないため新造も修理も出来ず、消耗して数が減り、次第に外国商人に取って代わられた。13世紀の主たる貿易相手はノルウェーだったが、アイスランドと他の国との貿易を支配することは、王にとっては統治上大変有力な武器となった。アイスランドは当時1年に少なくとも船6隻分の生活必需品の輸入を必要としていた。初め王はその積荷に対して基本税をかけ、後にはすべての船から謝礼を取った。しかしノルウェー

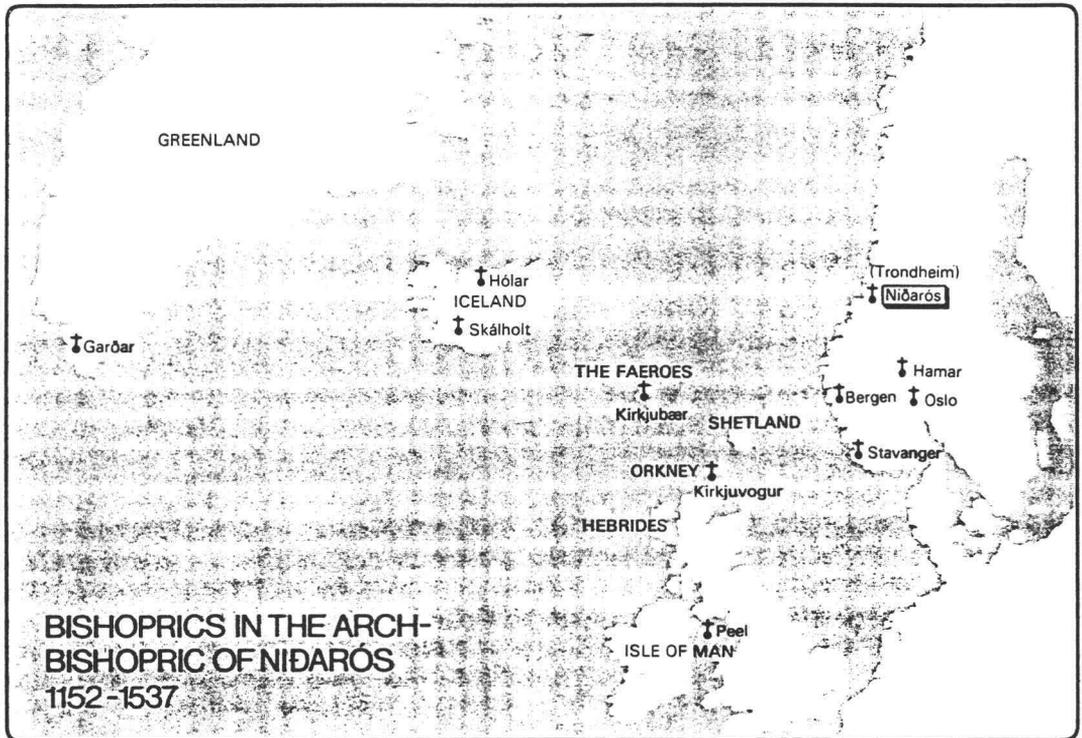
王は概してアイスランドの行政には余り干渉せず、ある程度の歳入で満足していた。一方アイスランド人は、王の施政官が彼らの権利を侵害しないように努め、横柄・無法な者には、時に武器を持って立ち向かった。しかし1275年の新教会法はアイスランドの教会に、他の西欧諸国同様の特権的地位を与えた。さらに1297年にはあらゆる教会・所領・後援権は、世俗の手を離れて牧師の手中に収まった。教会の財産は急増し、その勢力・影響力も増大した。こうして宗教改革前に既に教会は、この国の土地・財産の半分を所有していた。

[デンマーク王期 1380～1874～1904～1918～1944]<sup>28)</sup>

1380年アイスランドは、ノルウェーと共にデンマーク王の治下に入った。これより前の13世紀末ごろハンザ商人がノルウェーに拠点を確保し、魚やその製品、特に干魚と魚油を求めた。これに応じてアイスランドに漁業時代が始まり、羊毛は

その地位を譲った。1400年以後は英独の商人が直接アイスランドに漁業製品を買付に行った。15世紀一杯と1540年までの英独との貿易は、時に英独の間に流血事件があったが、アイスランド人には好都合だった。自然災害やペストもあったが、一般庶民には貯蓄ができ、下層民さえも潤った。

ここでアイスランドの「宗教改革」について見て置く必要がある。1536年にクリスチアンⅢ世が王位に就き、翌年新教会法を施行したが、アイスランドではその強欲・傲慢・無礼に対し、主に牧師たちが強く反対して施行できなかった。1540年、スカールホルト司教区(第6図)に熱心なルーテル派のギースル エイナルソンが受任した。彼はアイスランド人の明敏な政治家で、王国に対しては機転と熟練で対処し、生存中アイスランドをそれ以上侵害させなかった。1550年ホッラル司教区に受任したローマンカソリックのアイスランド人ヨウン アラソンも無類の指導者、不屈な詩人で、かつて認知・尊敬されていた昔の教会



第6図 ニザロウス大司教区下の司教区分布 (1152～1537)<sup>28)</sup>。

の秩序と権威を、新教徒が蹂躪するものを看過できなかった。西欧諸国に高まっていた反宗教改革運動で新教徒は鎮圧されるものと信じていたが、これは見込み違いで、彼は2人の息子と共に王の命令でその手先に斬首された。これがその国の「宗教改革」であった。

この2人の死後、新宗教制度に対するすべての抵抗は終り、アイスランド人にはもう政治的指導者はいなくなって、人々は大部分が新教に帰依することになった。王と役人は思うままにアイスランドに命令し、莫大な修道院の財産、教会の所領を没収した。こうして王はアイスランドの6分の1の土地・財産を持つに到った。(先には半分、ここでは6分の1とあるが、同一文献<sup>28)</sup>による)こんな王権の増大とは逆に、アルシングの力と影響力は低下し、立法能力も失われた。要するアイスランドの宗教改革とは専ら外国の政治的意図から出たもので、ドイツなどのように旧教の腐敗を暴き、理性的に新教に変えようというものではなかった。なお1992年のアイスランドの宗派別割合は、アイスランド教会が92.6%、他の新教が3.2%と圧倒的で、ローマンカソリック0.9%、その他3.3%。これには近年復活を認知された昔のアイシル神崇拜、いわゆる異教も含まれているはずである。

次に「貿易独占」について見よう。クリスチアン三世は即位後まもなく前任者同様、アイスランドにおける英独商人の活躍に目を向けた。西欧諸国はアメリカにある各国の植民地との貿易権を、それぞれの国の商人だけに限定していたので、デンマークもまた植民地アイスランドとの貿易権をデンマーク商人だけに限定すべきだと考えた。16世紀後半、デンマークは英独商人に種々の貿易障壁を設け、1602年には完全に独占を確立した。この決定は1787年まで続き、許可状の発行は王室に莫大な利益をもたらした。アイスランドの魚や漁業製品には外国から大きな需要が続き、農業は減退して海岸には無数の漁村ができた。前に英独人と貿易をしていた頃は、輸入品が欠乏することもなかったが、独占下ではそれは高価・希少・悪質になり、一方輸出品の価格は前と同じかまたは



写真1 黄金時代のサガ朗読で苦境に耐える暗黒時代の人々(シオット筆)。  
下落した。

農民や漁民がこんな悪い状況にありながら、デンマーク政府も、外国商人も、アイスランドの豪族たちも改善の努力を怠り、貿易独占からはぼ100年経った17世紀の末頃には、アイスランドの社会状況は最悪になった。写真1は国立美術館にあるシオット筆の「黄金時代のサガを朗読して苦境に耐える暗黒時代の人々」であり、第3図の人口低下の極にある1709年の34,000人は、天然痘による18,000人死亡を示すが、当時のアイスランド庶民はこの絵のようであったと思われる。

「改善の機運」<sup>28)</sup>

アイスランドの高級官僚、少なくともその一部は、代表団を送って自国の難局をデンマーク王に説明した。この結果、当局は経済状態の比較調査、商業の規制、官吏の指導を実行した。これにより重大な数多い欠陥が発見された。新価格日程表が導入され、小作人の負担が軽減された。当局はアイスランド駐留の官僚に、より厳格な監督を始めた。1703年には精密な人口調査を行なって総数が50,358人と判明した。この調査で注目すべきことは100人中11人が生活困窮者であったことである。なお1709年に約34,000人に下がった人口はすぐ回復したので、1730年以後デンマーク当局はアイスランドの普通教育に関心を向けた。その水準は意外に高く、読み書き能力はすでに庶民に広まっていた。さらに18世紀末には、初等教育が教区牧師の指導の下に各家庭で実施され、増加する人口の大部分は読み書きができた。前述のように、旅行した外国人は農家の娘からラテン語で話

し掛けられ、仰天した。(この特色は20世紀になると英語に替わって、一層通じ易くなった。)

18世紀半ばにはアイスランド人の経済関係官吏スクーリ マグヌッソンの主導で、農業・羊毛・漁業の改善計画が実施された。首都には羊毛工場が建ち、十余年かけて操業を開始した。しかし間もなくデンマークの独占商人と衝突し、工業改革は独占政策の廃止までは不可能と分かった。

ここで当局は全く別な方向に目を向け1752～57年に2人の若い博物学者ビャルトニイ パウルソンとエッゲルト オウラブソンを国費で国内旅行させ、自然と住民を科学的に記述させた。その旅行記は第1級の価値を持ち、英・仏・独語に訳されてアイスランド関係の重要資料となった。前者は早世、後者は1760年に国家医師第1号になり、基礎医学の改善に尽力した。さらに1770～80年の間に道路改善法が通過し、農業改善、郵便事業の開設、荒廃した農場の再建・再入植に貢献した。この改善傾向にもかかわらず、アルシングは1800年、ついに停止させられた。

### 3 独立闘争時代(1779～1944. 王と多数指導者との闘争記載、人口変動)<sup>28)29)</sup>

「文化的・政治的独立運動」1779年、コペンハーゲンにいたアイスランド人学生たちはヨウンエイリークソン指導の下に独立を目指して「国民芸術科学促進協会」を結成したが、その死と共に協会は衰えた。1794年のアルシングで同じ目的の協会がマグヌッス ステフェンセンの指導で発足した。彼はローマン主義的国家主義を掲げ、後には高等法院院長になり、数十年間も国の知的活動の原動力となった。19世紀が始まってすぐ1807～14年にアイスランドには新しい問題として、ナポレオンの大陸封鎖に伴う英丁紛争があった。幸い英国は理解して、生活必需品の輸入は可能だった。1816年にはデンマークの言語学者ラスムスラスクの示唆で「アイスランド文学協会」が発足し、1818年にはアイスランド国立図書館が設立された。主導者はラブンで、数年後には王立北方言語協会を作り、アイスランド古典文学を短期間に全欧の学者・文学団体に周知させた。若い詩人や学者たちも大いに声を高めた。有名な人に高等法

院判事で詩人のビャルトニイ ソラレンセンや中学校校長のスヴェインビョルトン エイイルソンがおり、後者は詩人・言語学者で、アイスランド語の純化に誰よりも貢献した。因果関係は問わないが、人口は1785年辺から回復し始め、1801年47,240人、50年59,157人、1901年78,470人、1950年に143,973人となった。<sup>42)</sup>

1830年頃、政治的覚醒の徴が現われた。それは英丁紛争の終結とそれによる経済の回復、さらにフランス七月革命の大きな影響であった。デンマーク王は諮問委員会を招集したが、アイスランド人はアルシングを復活して自ら立法権を得ようと闘争を開始した。その初代の指導者はコペンハーゲンにいた学生バルドヴィン エイナルソンで、パリ革命の1年後こう手紙に書いた。「今や人類の自由精神は目覚めた。王や絶対支配者にこの権利をば要求しよう」。その事故死後、ブリニョールブル ペットゥルソン、最大の詩人ヨウナスハトルグリムソン、コンラウズ ギースラソン、トーマス サイムンドソンの4人が新雑誌『フォルニル』(オーデンの意)を1835年に発刊して、その綱領に「我々はアイスランド人でありたい。その国語と国民性を求めよう。アルシングをシングヴェトリルに復活させよう。」を掲げた。この闘争は諸貿易制限の撤廃、教育・公衆衛生面の改善をも含み、長く苦しいものだった。さて1843年にアルシングは新たにレイキャヴィークに復活したが、それは諮問機関としてで、立法権はまだ無かった。1845年、ヨウナスが亡くなって間もなくフォルニルも廃刊となった。1848年にデンマーク王は絶対主義を再び宣言して、1262年の「古い盟約」の下でなら同盟に同意するとした。しかしヨウン シグルツソンの率いるアルシングはこれを断固拒否し、自由貿易だけを1854年に獲得した。

彼は1840年から1879年までアイスランド独立のために戦った。1841年には『新協会報』を発刊して、信教、言論、出版の自由を求め、30年以上もこれを継続した。1851年のレイキャヴィーク国会での強い自治要求に対し、デンマーク代表は暴動を恐れて軍艦と武装軍隊で脅し、交渉は持ち越された。1874年、「アイスランド植民千年祭」が行

なわれ、後の国歌「おお 我国の神よ」が歌われた。デンマーク王クリスチアンIV世は多くの随員、外交団をつれて出席した。そして「王とアルシングとは連合して立法を行ない、国家財政の管理も可能」という新憲法を伝えた。これで1885年にアイスランド国立銀行が設立された。しかしアイスランド人は不満で、ますます独立運動は盛んになった。

1904年ハネス ハブシュテインはアルシングで選ばれて「アイスランド大臣」となり、国民念願の自治権を獲得して、教育、運輸、漁業、貿易などに大きく貢献した。1911年アイスランド大学創立、1915年婦人参政権獲得、1918年「デンマーク王の下での自治」という連合条約に調印した。この中で外交権と海岸防備権はなおデンマークに残された。

アイスランドも1930～40年、世界の一大恐慌に巻き込まれた。その政策は外国から猜疑と躊躇の目で見られ、道路、橋、港湾、工場、船舶の基幹建設より、まず農民・商人の破産、町へ集まる労働者の失業対策が優先した。しかしニシン漁の好況で、次第に景気は好転した。

1940年、デンマークがドイツ軍に占領されると、アイスランドにはイギリス軍が上陸して防衛に当たり、翌年にはアメリカがこれに替わった。防衛景気で物価や賃金は上がり、インフレーションも起きた。しかし住民の知恵と努力でこれらも徐々に乗り切れた。

1918年の連合条約は1943年末まで強制され、1940年末までに双方から改訂要求がなければ、新条約が生れることになっていた。大戦のため交渉ができず、1944年5月の国民投票が示した95.04%の圧倒的賛成に基き、7月17日、アルシングはシングヴェトリルの「法の岩」で、はるか昔1262年に失われた自由共和国の新たな独立を宣言し、慶びの鐘は全国に2分間鳴り響いた。同時に初代大統領スヴェイトン ビョルトンソンを選出した。

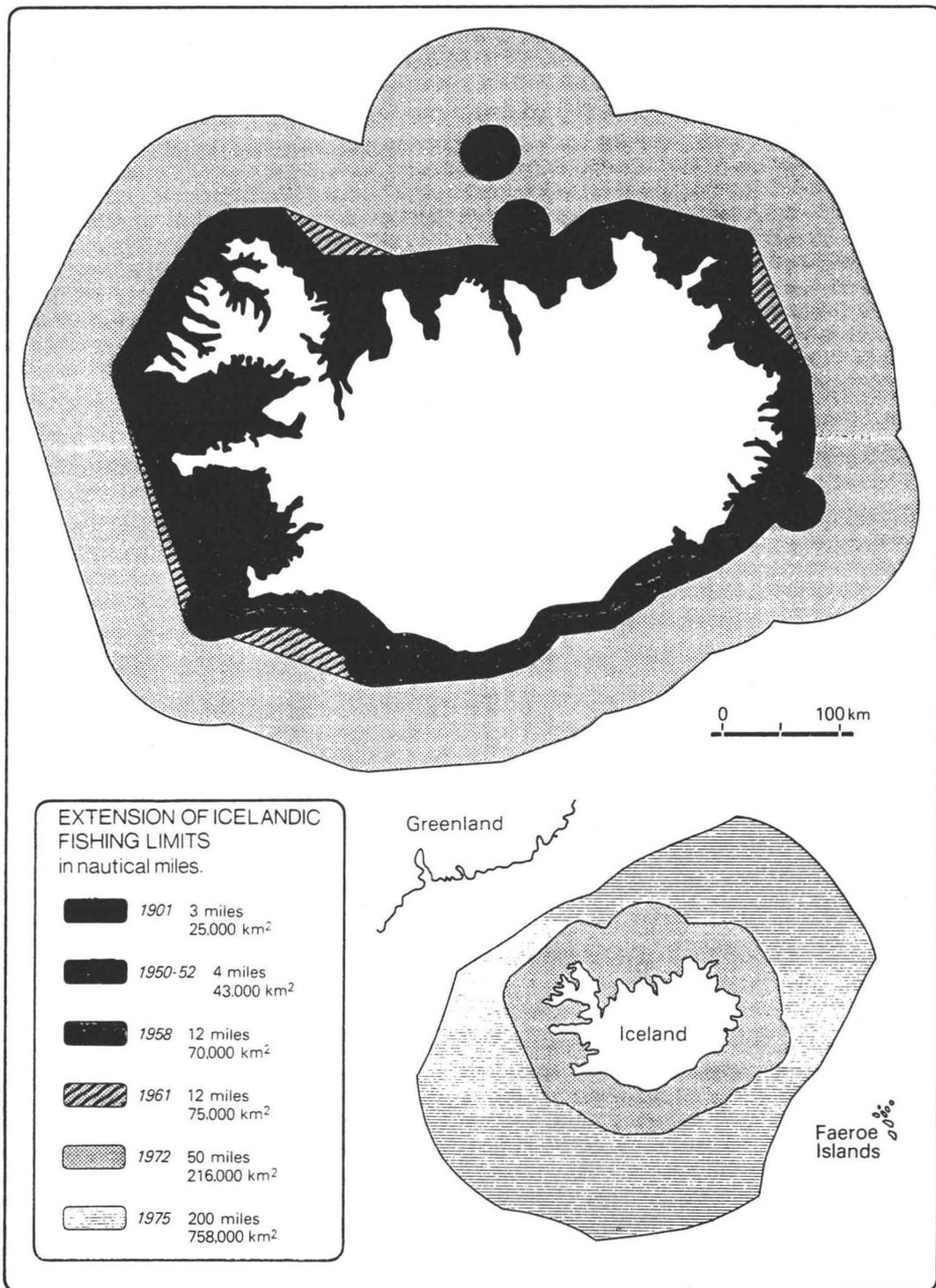
なお独立運動家ヨゥン シグルズソンは「アイスランド最良の息子」「最大の自由への戦士」として国民から崇められ、その誕生日6月17日は国

民休日となり、銅像は国会議事堂前と首都市内の墓地に立っている。その生家とコペンハーゲンの家とは博物館になっている。

#### 4 独立時代(50年間の国内外の政治経済的發展記載、人口急増の背景)<sup>28)42)</sup>

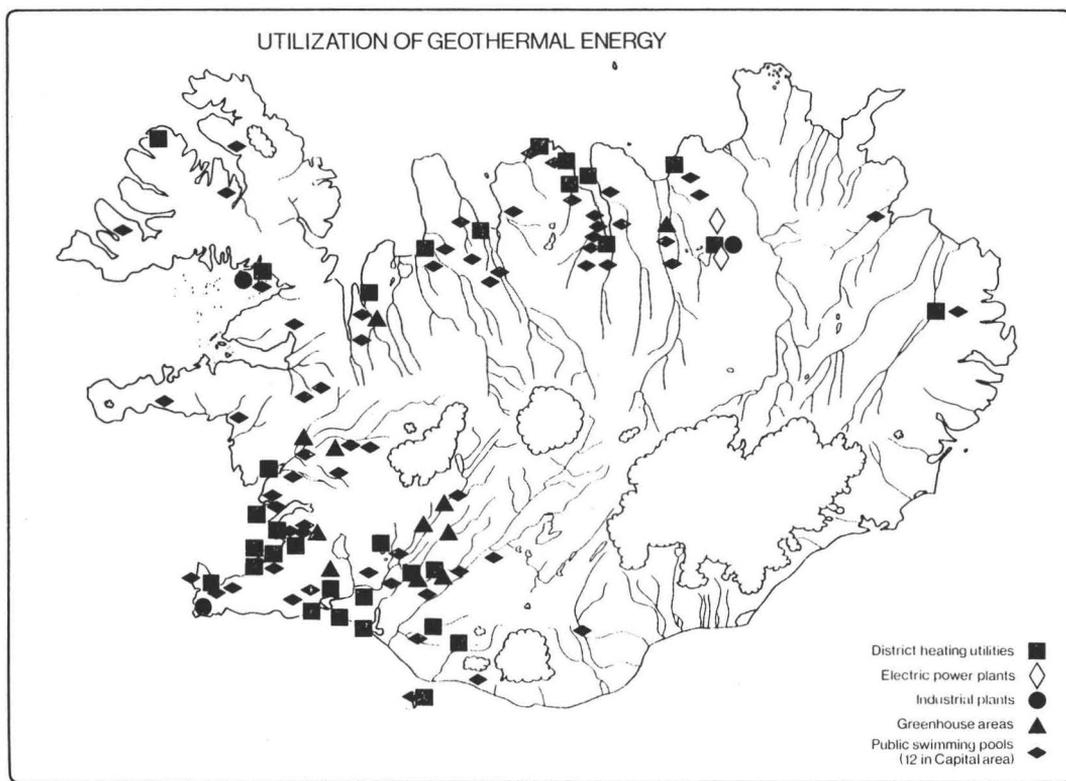
独立そして大戦終結後まもなくアイスランドの商業用・漁業用船舶は更新され、農業は機械化され、新しい工業が開発された。国内線および欧米を結ぶ国際線の航空路も急に発展した。外交ではすぐに国際連合に加盟、アメリカが大戦中に設けたケプラヴィーク空軍基地使用を1946年秋、アルシングは許可してNATOの創立メンバーになった。漁業水域の改定が科学的大陸棚漁業資源の保全と、アイスランドが漁業以外に生存の道がないことを根拠に実施された。1950～52年に3海里から4海里へ、58～61年に12海里へ、72年に50海里へ、75年に200海里に拡大した(第7図)。このため途中では外国(主に英国)との激しい漁業権争い「タラ戦争」もあったが、1980年頃からこの水域に外国船は来なくなった。1970年にEFTAに、後にEECに加盟した。1967～68年にはニシン漁が減り、その上、輸出単価が下落して打撃を受けた。1973年にはヘイマエイ火山が1000年ぶりに噴火して5,000人の住民が一時本土に避難し、その漁業は打撃を受けた。1974年には建国1100年祭を行ない、同年南部の広いサンドル(氷河からの大洪水が作る暴れ河の跡)に長い橋を掛けていわゆる一周道路が完成した。1980年に劇場経営者ヴィグディス フィンボガドゥティル(1930年生)が世界最初の女性大統領に当選した。欧米を足繁く回って外交を重ね、日本にも数回来てファンも多い。1996年夏まで4期16年を勤める予定。

独立後に発展した産業中、この国に即した独特のもの、輸出額の大きなものを展望して見る。国情に即したのものには、温泉利用の暖房給湯事業、自給を目指した化学肥料工業およびセメント工業があり、大規模なものには何れも輸出用の国営企業で、ミィ湖の湖底に眠る珪藻土の精製工業、有り余る水力発電の電力を使うアルミニウム精錬工業と同じく珪素鉄合金工業がある。これだけ



Source: Icelandic Hydrographic Service

第7図 漁業水域の拡大 (単位: 海里)<sup>28)</sup>。



第8図 地熱利用状況 (1984)<sup>28)</sup>。地域暖房とプール・地熱発電・工業・温室。

力を開発しても、まだ可能発電量の1割にならない。

温泉はずっと昔から洗濯などに使われていたが、首都では早くも1928年に掘削が始まって公共のプール、病院、学校、周辺の住宅に利用され出した。全国で1940年頃から開発が進み、1984年末で29地域、人口の79%がその恩恵を受けている。(第8図) これは熱量計算で暖房・給湯に84%、温室に5%、工業に5%、発電に4%、プールに2%が利用され、値段は石油の20~25%、安い電力のさらに半分である。この温室とは15万m<sup>2</sup>でトマト、キュウリなどの野菜や諸種の花卉類を産する。化学肥料工業は既に1899年にデンマークからの独立を目指して企画されたが、不況と世界大戦のため着工できなかった。1954年、主としてマーシャルプラン援助によって、ソグ川にイーラフォス発電所が建設され、首都近くのグブネースに肥料工場が建設された。その電力20メ



写真2 秋、耕作牧草畑に準備された化学肥料。遠景は羊。(N-P-K:20-6-11.7% N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>O:20-14-14%) (1983浅井)

ガワット時を用い電気分解法で窒素肥料が毎年約7,000トン生産され、国内の耕作牧草地に使われる(写真2)。セメント工場は首都対岸のアクラネースにあり、近海海底より膨大な貝殻を吸い上げて原料としている(写真3)。その生産は1960

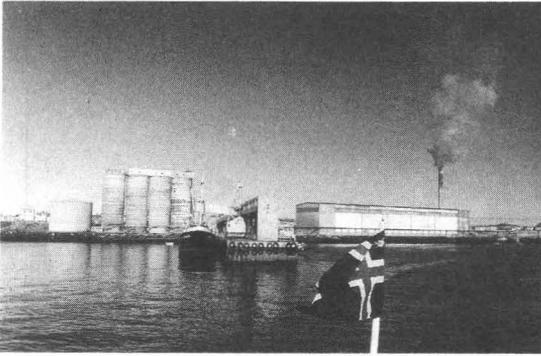


写真3 1960年頃操業を開始したアクラネースのセメント工場。(1964 浅井)

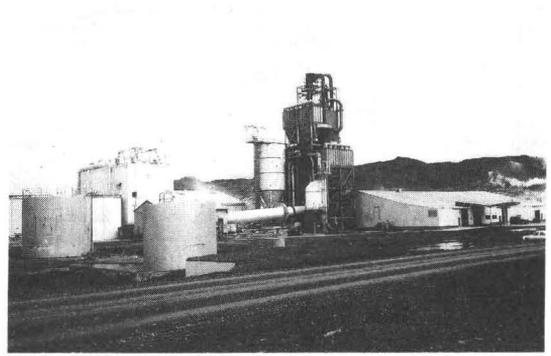


写真4 1970年頃操業を開始したミー湖畔の珪藻土工場。(1983 浅井)

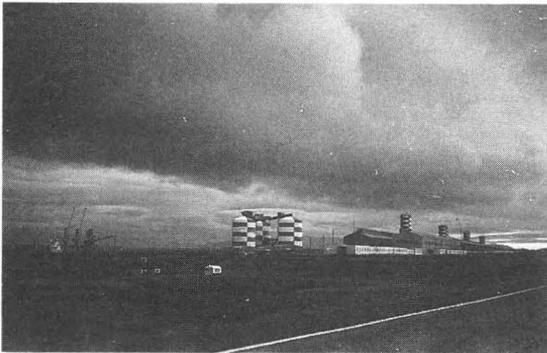


写真5 1970年頃操業を開始したストロイムスヴィクのアルミ精錬工場。(1973 浅井)

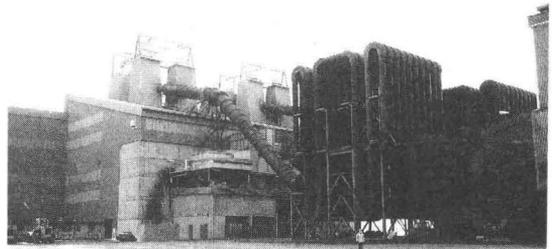


写真6 1980年頃操業を開始したグルンダルタンギの珪素鉄合金工場。(1983 浅井)

年以來毎年12万トンあり、植民以來芝土屋根の半地下暮らしだったアイスランド人は、陽光溢れる独立・高層住宅に住み、堅牢な工場・橋梁・港湾施設などを建設するに至った。

輸出工業の珪藻土は、ミー湖畔でその湖底にある無尽蔵の珪藻土を吸い上げ、地熱で乾燥し、重油キルンで精製して1970年以來毎年約2万トンにヨーロッパの化学工場に出している(写真4)。アルミニウムは、大河ショールスアウ河中流にあるブルフェトル発電所の電力を使い、首都南西方12kmのストロイムスヴィークに1975年建てられた電気炉工場で原鉱を精練し、1970年以降毎年約8万トンを出している(写真5)。珪素鉄合金工場は、セメント工場と同じくアクラネース半島にあり、ショールアウス支流のシガルダ発電所の電力を使い、巨大な電気炉で1979年に生産

を始めて、毎年3~4万トン輸出する(写真6)。これには日本の住友も提携している。こうして輸出品には構造変化がおり、かつては総輸出額の93%を占めたこともある魚とその加工品は、1994年には76.3%に下がり、工業製品は22.1%に伸びた。なお農産品は1.6%に過ぎない。<sup>39)</sup>

#### IV 人口増減の自然的・社会的考察

##### 1 自然による人口増減の考察第1部の詳説 気温低下と人口減少の定量化

IIの6)でこの第1部の導入部を述べた。要点は、第3図下に示す1200年以後の人口減少曲線の上縁を結び、滑らかな右下りの線が眼に浮かぶ。これを「上縁部下降線」と呼ぶ。これに関して3点が問題になる。①この仮想の上縁部下降線とは何か。浅井の仮説は黄金時代

以後の長年にわたる気温低下、過放牧・燃料採取による草地や森林の荒廃、豪族の内紛や外来の政治的・宗教的影響下における牧畜生産力の永年に亙る低下線である。②その下の鋸歯状凹みが噴火災害や伝染病によることは前述したが、毎回その後の人口回復線がいずれも値民期や1800年ごろからの人口増加線と傾斜が似ているのはなぜか。仮説は、人口増加時の一般傾向で、今、細論には立入らない。③災害後の人口回復が上縁部下降線まで昇るとそこで止まり、昔の8万人まで戻らないのはなぜか。仮説は、この仮想の線が正にその時代の最高人口支持力だったからであり、当時の自給的生産力ではもうこれを越えて8万人までは行けなかった、と考える。なお①と③とは同一現象の両面である。

以上3点の問題とそれに対する仮説をさらに2法でを解明して行きたい。第1は重要作物大麦の歴史上の盛衰を古文書、地名、販売契約書、花粉分析などから見る<sup>47)</sup>。これは10～11世紀には各地で栽培されていたが、12世紀末には北部・東部で栽培が止まった。13～14世紀になると南部でも減少して、1350年の記録では南部の数か所だけ、となった。小氷期といわれる17～19世紀にも、各地で栽培試験は行なわれたが、どうしても永続しなかった。しかし1920年からは、南部の試験地で10年に8～9年の成功を収め出した。1930年からは全国各地の試験地で10年に6～7年成功している。実際1964年秋、浅井は南部の一試験地で、刈り集められた大麦の山を実見している。

また大麦栽培の時代変化と第3図上のベルグソールソンの10年間平均推定気温（ベ氏気温と略す）とを較べると、相当よく合うことに気付く。

第2は、人口減少に対する気温低下の影響をできるだけ定量化しようと、大胆ではあるが「ベ氏気温」を、筆者らの得た1960年代における全国の牧畜生産力75万kcal/ha. yr.<sup>14)</sup>に組み合わせて、各時代の大まかな牧畜生産力ならびに人口支持力を計算して見た。根拠は、これらがレイキャヴィークの温量指数19.5℃（1931～60）、少し粗く見ればその同じ期間の年平均気温5.0℃や、ベ氏か推定基準とした東部（テイガルホットン）・西部（スティクスホルムル）の同じ期間の年平均気温4.3℃に対応するはずだからである。あとはベ氏気温の推定基準となった1901～30年と、生産力算出の1931～60年の、各平均気温に差がないかである。手元に

はこれらの1901～30年の平均値はないので、「アイスランド気象年報創刊号」（1924年）以降を計算して、東部・西部の1924～30年の平均値が4.3℃、1931～60年の平均値も4.3℃と、両期間に差がないことを確認した。そこでこの東部・西部の基準温度4.3℃と、牧畜生産力とに今も昔も直線的相関があると仮定して、3時代の牧畜生産力と人口支持力を計算した。

この1500年頃の推定人口支持力6.97万人は、第3図に引いてはないが、同時期の上縁部下降線、つまりステフェンセン氏人口の6.9万よりわずかに多く、また1801年の人口支持力5.94万人は、同時期の上縁部下降線、つまりス氏人口（センサス人口）の47,240人より約1.2万人多い。換言すれば、ス氏人口は気温低下による牧畜生産力の低下以外の、例えば草地の荒廃、土壌の悪化による低下分やさらに政治的・宗教的困難による低下分と見るべきである。当時、別のカロリー源として相当の漁獲があったとしても、ス氏人口はこの推定人口支持力に達しなかったものと見られる。さらに各種自然災害によってス氏人口の鋸歯状凹みが生じたものと考えられる。

以上の2法、特に人口支持力の計算により、人口に与える気温低下の影響力の意外の大きさが具体的に分かり、それ以外の自然や政治宗教的因子の影響は、併せてもこれに及ばないようである。この結論は、アイスランド国内に以前からある、人口変化の自然説と政治宗教社会説の、一方に有力な加担をするものと思われる。

## 2 内紛や外来政治・宗教による人口減少

上述の政治・宗教関係事象中、人口に関係しそうな点を列挙する。しかしその影響を数字で示すことが、今度は困難だとご承知願いたい。④キリスト教が広まってからか、共同体精神を失ったアイスランド人豪族たちが内紛に明け暮れて、土地を勝手に処分したため、民衆が貧困化したこと。⑤特に「十分の一税」を免れるために土地が教会

第1表 ベ氏気温による史上3時点の推定牧畜生産力と人口支持力（浅井 1995）

[時代] [ベ氏気温℃] [牧畜生産力, kcal/ha. yr.] [人口支持力, 人]

黄金時代末期 1200年頃	4.0	75万×4.0÷4.3=70万	第3図より8万人と前提。
暗黒時代中期 1500年頃	3.5	75万×3.5÷4.3=61万	8万×61万÷70万=6.97万
“ 末期 1800年頃	3.0	75万×3.0÷4.3=52万	8万×52万÷70万=5.94万

へ寄進され、民衆はその自主的活用が困難になったこと。⑥暗黒時代が進むとともに、アイスランド人の船は減って貿易は外国船に頼るようになり、農産品・漁業品の自由な輸出は廉価・困難になり、必需品の輸入は高価・不便になって、民衆の取得分が減少したこと。⑦デンマーク王の貿易独占政策はこの弊害を一層増加させてアイスランド人を史上最悪の状態に陥れたこと。⑧この政策は農場改良、道路建設、漁法改善などに対する民衆やアルシングの進取の気性をいじけさせた、ことなどが挙げられよう。

⑨ハンチントン<sup>34)</sup>によれば、「少なくとも3世紀以前に無学の女性は結婚を禁じられていた。1644年に書いたラペイレルの本に、古代アイスランドでは首長(ゴジ)は乞食に対し、その増加を防ぐために彼らを殺すか去勢する権利を持っていた。また貧乏人が貧しい女性と結婚することだけでなく、自分で十分生計を立てて行ける人でさえも、何ら自活の途を持たない女性と結婚することを禁ずる法律を持っていて、これを犯す者は流刑に出来た。残酷ではあるが、この効果的な優生政策は、詩や歴史やチェスに熱中する知的な人々の間に広く行なわれていた」と。これについて1964年に浅井が故S. ソウラリンソン博士に質したところ、同氏は即座にこれを認めた上、現在は行なわれていないと明言された。この記述を、民衆の生活が苦しかったためと読むか、さして貧しくなくても、アイスランド人社会の健全性を保つための優生措置と読むかは、俄には決められない。だが人口の増減を考える上では重要である。また流刑など諸種の刑罰によるとか、強烈な異常性格によるとかで、故郷の民衆に入れられず「無法者」になった者がいたことも、有名なその名の彫刻「家族を背負い、太い杖を持ち、犬を連れた彫刻」<sup>28)</sup>から事実であろう。聖域シングヴェトリルの割れ目もここでの国会発祥以前は、このような無法者の隠れ家であったという。

⑩人口に関して熊野<sup>16)</sup>は、異教時代からアイスランドには北欧ともども、貧しい人達が子供を捨てる習慣があり、これは不法行為ではなかったし、キリスト教化後も当面、嬰兒遺棄は許されて

いた。これは奴隷だけではなく自由人でも行なわれたという。顧みて徳川時代の日本の人口は、間引によって3,000万人前後に抑えられたが、明治～昭和に1億人以上に急増したことは産業政策の良い面であり、大東亜戦争による戦死傷者、ソ連抑留者、残留孤児などの発生は、日本の対外政策の悪い面として記憶さるべきであろう。

### 3 独立闘争期、独立後の人口増加

さて1785年の谷間人口40,623人以後の人口急増はどう考えるべきか。時はラーキ火山の溶岩流出直後であり、2年後にはデンマーク王の貿易独占が終結する、1811年からはヨウシグルツソンの独立運動が始まる、1843年にはアルシングが諮問機関ながら復活する、1854年にはアイスランド人の外国貿易完全自由化、というように民族的覚醒が起こり、中世の貧しい自給経済から近世の豊かな交易経済へと経済的発展が相次いだ。

この背景の下に人口増加に転じたのであるが、その1年当り人口増加率<sup>42)</sup>をセンサスおよび1953年以後の国民登録で見ると、1801～1910年は1%以下(ただし1855年は1.57%)、1920～50年が1%以上、1953～59年が2%以上、1960～83年が76～78年を除いて1%以上である。UN資料から日本を含む先進各国の人口増加率を見ると、1950～60年が1%以上、以後が0.89～0.60%程度で、アイスランドでは1960年以後も1%以上が続くのが目に付く。

この理由を最近の1人当りGNP(米ドル)で世界と比較すれば、暗黒時代との国民生産の差、従って人口増加が理解できよう。外務省外務報道官編(1994)『世界の国一覧表1994』によれば、スイス36,230、ルクセンブルグ35,260、日本28,220、スウェーデン26,780、デンマーク25,930、ノルウェー25,800、アイスランド23,670、アメリカ合衆国23,120、ドイツ23,030、オランダ20,590、カナダ20,320、の順であって、アイスランドはアメリカやドイツを超し、秘められた高いアイスランドの生活水準が推測できる。実際各家庭は随分広くゆったりとし、どこにも2～3台分のガレージがあって実際の豊かさは日本以上である。

アイスランドの人口学論文を余り知らない。第3図の元になったステフェンセン論文も、図を引用しただけである。従って上記の試論には盲蛇の感があるが、人口を左右する自然・社会因子記述中に発見した、IV-1)の気温低下に潜む恐るべき人口支持力の低下という観点を、早く討論の場に載せたくて執筆を敢行した。どうか諒とされたい。

#### 4 アイスランドの人口増減に関する当面の結論

①黄金時代の人口は、牧草適地が当時の技術で利用し尽くされるまで増加し、若干の漁獲や北欧からの輸入品もあって、1200年頃には8万人に達した。②その頃に始まる気温の長期低下傾向は、第1表のように3時代についてはっきりと牧畜生産力を低下させ、1800年頃には支持人口を5.94万人まで減らした。しかしこの仮想の支持人口線は、ほかに悪い事がないときの最高人口支持力であった。③従って第3図下のス氏人口グラフの上縁を結んだやはり仮想の「上縁部下降線」は、支持人口線より常に下にあった。その差はほかの悪い自然・内紛・外国政治・キリスト教などのために、実際には存在し得なかった人口と見られる。④独立闘争期以後の人口急増は、アイスランド人の進取的気性に従って、デンマークの政治的・商業的障害を排除し、漁業を振興させ、西欧水準の新科学技術を導入し、港湾・都市・交通網を建設し、工業・交易を盛んにして、初めて獲得しつつあるものと思う。

[付記] 5月の記念講演ではもっと幅の広い講演要旨を配り、時間の許す限りそれらにも言及したが、今回原稿用紙に直した所、意外に紙数を要したので講演要旨に書いた「日本へのアイスランド紹介史」「日本の地理学に関係深い研究分野」は割愛する。これらは拙編<sup>15)</sup>に十分書かれており、掲載誌は地理学評論だから割合に見やすいと思う。(筆者は1948~1967年法政大学教授・講師)

#### 付 参考文献と旅行案内

##### [入門書]

- 1) 拙著(1984)アイスランド。小学館 日本大百科全書(ニッポニカ2001)。
- 2) 拙著(1995)アイスランド。TBSブリタニカ 国

際百科大事典。

- 3) 拙著(1978)アイスランド。大明堂 世界地誌ゼミナールIV ヨーロッパ。
- 4) 拙著(1979)アイスランド。朝倉書店 世界地理6 ヨーロッパI。
- 5) 森田貞雄と共著(1980)アイスランド地名小辞典付大判地図。帝国書院。
- 6) 竹内均(1978)燃える島—マントル対流の現場から—。筑摩書房。
- 7) 山室静(1963)アイスランド 歴史と文学。紀伊国屋新書D-2。
- 8) 谷口幸男訳(1994)ヴァイキングの知恵。GUDRÛN. Printed by Oddi Ltd. Iceland.  
[研究書・引用文献](網羅的ではない。:引用していない新しい関係文献)
- 9) 拙著(1968~1980)アイスランド全国地誌(1~7)お茶の水女子大学人文科学紀要 1. ('68)地質・内力地形(21-2)<sup>10)33)34)51)50)40)17)</sup> 2. ('69)地球物理学的諸現象(22-3)<sup>52)49)44)24)21)30)</sup> 3. ('70)海洋・陸水・気候I(23-2)<sup>40)41)51)47)48)10)25)</sup> 4. ('73)気候II(26-2)<sup>53)23)12)</sup> 5. ('74)気候III(27-2), 6. ('78)外力地形I(31)<sup>51)50)40)24)23)54)38)</sup> 7完. ('80)外力地形II(33)<sup>45)46)35)36)32)</sup>。
- 10) 拙著(1967)アイスランドの気候変化<sup>25)47)</sup>お茶の水地理9。
- 11) 拙著(1968)アイスランドの文化と気候変化<sup>34)47)25)</sup>小牧実繁先生古稀記念論文集 大明堂。
- 12) 拙著(1970)地理学の定量化に関する一試論—環境・素質という二元論の統一例—<sup>53)34)</sup> 渡辺光教授退官記念会 現代の地理学 古今書院。
- 13) 拙著(1978)『地理量』概念の設定と気候学・生態学象限におけるその実例—日本とアイスランドの農業を基として—。探険・地理・民族誌 今西錦司博士古稀記念論文集 中央公論社。
- 14) 拙著(1984)アイスランドにおける農業および漁業の生産力に関する研究。東海大学総合研究機構 アイスランド極地調査基地に関する報告書1。
- 15) 拙著(1991)アイスランドの自然地理学。(9人の共著) 地理学評論 A64-2。
- 16) 熊野聡(1994)サガから歴史へ—社会形成とその物語。東海大学出版会。
- 17) 杉村新(1967)70万年前。科学37
- 18) 谷口幸男(1979)アイスランド サガ。新潮社。
- 19) 能勢幸雄・石井丈夫・清水誠(1988)水産資源学。東大出版会。
- 20) 能勢幸雄(1994)アイスランド共和国の魚と漁業。おさかな普及センター資料館年報13

- 21) 宝来帰一 (1968) 広がる海底 科学 38-4
- 22) 森田貞雄 (1981) アイスランド語文法。大学書林。
- 23) Asai Tatsuro (1967) The asymmetrical "Siglugully" in Iceland. 資源科学研究所彙報 69.
- 24) Asai Tatsuro (1968) The Postglacial Big Landslides in Iceland, illustrated by Stereographs. Nat. Sci. Rep. Ochanomizu Univ. 19-2.
- 25) Bergthorsson, P. (1962) Notes on past temperature of Iceland. Conf. 11th & 16 Century. Aspen.
- 26) Bergthorsson, P., et al. (1988) Effects of climatic variations on agriculture in Iceland. Parry, M. L. et al. eds. The impact of climatic variations on agriculture. Vol. I. UNEP & Kluwer Acad. Publ. Boston, London and Dorecht.
- 27) Byock, J. L. 著 柴田忠作・井上智之訳 (1994) サガの社会史—中世アイスランドの自由国家。東海大学出版会。
- 28) The Central Bank of Iceland. (1987) "Iceland 1986". その後まだ続刊はない。
- 29) Elias Snaeland Jónsson (1994) The Republic of Iceland 50th Anniversary. Lindin.
- 30) Einarsson, Trausti (1965) A Survey of Gravity in Iceland. Societas Scientiarum Islandica 30. Reykjavik. 関係部分を在住の稲葉隆子氏訳。
- 31) Friðriksson, Sturla. (1973) Líf og land. Um vistræði Íslands. Varði. Sigfúsar Eymundssonar.
- 32) Friedman, J. D. et al. (1971) Observations on Icelandic polygon surfaces and palsa areas. Photo interpretation and field studies. Geogr. Ann. 53. A 3-4.
- 33) Hansson, Ö. (1963) Facts about Iceland. Publ. Dept. Cult. Fund.
- 34) Huntington, E. (1945) 西岡秀雄訳 (1950) 文明の原動力。実業之日本社。
- 35) Jóhannesson, B. (1960) The soils of Iceland. Dept. Agric. B-13. Reykjavík.
- 36) Kim, Do Jong. (1967) Die Dreidimensionale Verteilung der Strukturböden auf Island in ihrer klimatischen Abhängigkeit. Inaugural-Dissertation Univ. Bonn.
- 37) Köppen, W. (1898) Jahres-Isothermen u. Isanomalien d. Meeresoberfläche. Ann. d. Hydr. usw. 26
- 38) Ministry for Foreign Affairs, Iceland. (1972) A Human Environment Sensitive to Climatic Changes. A Contrib. to U. N. Conf. on the Human Envir. Stockholm.
- 39) Ministry for Foreign Affairs, Iceland. (1995) Basic statistics of Iceland.
- 40) Malmström, V. H. (1958) A Regional Geography of Iceland. Nat. Acad. of Sci., Nat. Res. Council Pub. 584. Washington D. C.
- 41) Navy Intelligence Service. (1942) Iceland. P. 485. Geogr. Handb. Ser. B. R. 504. Cambridge.
- 42) The Statistical Bureau of Iceland (1984) Statistical Abstract of Iceland 1984.
- 43) Stefensen, Jón. (1963) Íslands folkemaengde gennem tiderne. Medsk. Forum, 16
- 44) Thorarinsson, S. (1937) Das Dalvik-Beben in Nordisland 2 Juni 1934. Geogr. Ann. 19
- 45) Thorarinsson, S. (1951) Notes on patterned ground in Iceland with particular reference to the Icelandic "FLÁS". Geogr. Ann. 33.
- 46) Thorarinsson, S. (1953) Anchored stone polygons at low levels within the Iceland basalt regions. Jökull 3.
- 47) Thorarinsson, S. (1956) The Thousand year's Struggle against Ice and Fire. Mus. of Nat. Hist. Dept. Geol. and Geogr. Mics. Pap. 14.
- 48) Thorarinsson, S. (1960) Roadlog I. West and North Iceland. Intern. Geogr. Exc. E I. 1 & Intern. Geol. Exc. A2.
- 49) Thorarinsson, S. (1964) Surtsey.
- 50) Thorarinsson, S., T. Einarsson and G. Kjartansson. (1959) On the geology and geomorphology of Iceland. Geogr. Ann. 41.
- 51) Thorarinsson, S. & Kristinsson, V. (1960) , (1968) Iceland. Axel Somme: A Geography of Norden.
- 52) Thoroddsen, Th. (1925) Die Geschichte der isländischen Vulkane. K. danske vidensk. Selsk. Skr. Nat. mathem. Afd. 8, IX. København.
- 53) Verðáttan Ársyfirlit Samið Á Veðurstofunni. (1924~1971) 気象年報各冊。
- 54) Wills, Leonard J. (1964) A Palaeogeographical Atlas of the British Isles and Adjacent Parts of Europe. Blackie & Son Ltd.  
[旅行案内所・案内書]  
「アイスランド政府観光局」〒111 東京都台東区浅草橋 1-1-15。☎ 03-5820-0771。ここで多種の和文・英文パンフレットが無料で入手でき、航空券などが予約できる。例えば、「Iceland 個人(団体)旅行への手引き」(各年、約60ページ)が貰え、美しいカラーの観光新聞「サガ ニュース」(季刊、年会費1,000円)も注文できる。